
僕の異世界転生記

AMAMOTO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕の異世界転生記

【Nコード】

N1639V

【作者名】

AMAMOTO

【あらすじ】

どこにでもいるようなおじさんの異世界転生記。

本人は転生させられるまで自覚がありません。

話が進むに従って基本チートで最強主人公ですが元が元なので予想の斜め上を

いくかもです（未定）

第01話　溜め息（前書き）

なんとなく書きたくなって来て書き始めました。

できるだけ執筆の間隔をあげないように努力しますので
何卒よろしくお願いします

第01話　溜め息

はあゝ（溜め息）

僕はもう何度、溜め息をしたらろう

目が覚めたら見慣れない初めて乗る船の中だった。

ちようど東の空が明るくなってきた

夜が明けようとしてるんだなと解る。

船の上からの景色はなにかもの凄く美しくて・・・

静かに昇ってくる太陽と雄大な360度見渡す限り海の大パノラマの中で

まだ残る清涼な肌寒さと静かな波の音

朝の白と夜の黒が織りなす幻想的で神々しいほどの荘厳な瞬間に
そつごん
堪らなくて溜め息がでるほど感動したのは決して感傷ではないだろう

おそらく10人いたら10人が感動すると思う

僕は、こちらに来ての初めての朝を自然と出た涙と感嘆の溜め息で迎えたんだ。

どれだけ時間がたったのだろうか。

ずっと感動で見つめているうちに太陽は水平線の上に完全に登り

僕は感動から心を切り離して
やっと僕自身のことや僕におこったことを
確認して理解しようと思うことができた

そう、まずはそこから始めないと何も進まない。
どこから始めたらいいのか分からないけど
ひとつずつ整理して思いだそう。

僕の名前は、すおつ かぜや周防和哉

年は39歳。

あまりいい社会人じゃなかったと思う。
人の好きな人間で頭もいいと、親や他人によく言われたけど
自分では、なんで俺はもっと上手くできないんだと
いつも自己嫌悪と反省を繰り返していた。
誰とも気軽に話せるけど、理不尽なことは大嫌いで
いじめられたりしている人や困っている人を見ると
どうしてもやるせなく感じてしまう

結局は、いじめている人や困らせている人を許せなくなつて
つい、他人ごとなのに口を出してしまう。

もっと上手に立ち回って角が立たないように
収めることができればいいのに

我慢を重ねて、見てみぬふりをしていたあげくに
つい瞬間的に我慢できなくて爆発してしまうのだ。

我ながら、そうなる前に心の整理とか諦観とかすればいいのに
それができないのなら、根回しとか説得とか相談とか
いろいろと出来ることがあるだろうに

それが回りまわって会社にいきずらくなったり
精神的なもので体調が悪くなったりして
自分で辞めたり、辞めさせられたり・・・

いつのまにか俺はニートになってしまっていた。
もう、何度も面接にいつて落ちるし

その度に落ち込んで

自己嫌悪してしばらく引き籠もるを繰り返していた

だんだん、自分が社会に必要とされていないのではないかと
疎外感を感じて、いや頑張ろう俺って、発奮して面接にいつて

いつたい自分は何をしているのだろう

いつしか俺はいろんなオンラインゲームに逃避ぎみな引き籠もりを
していた。

ここだけは俺が自由でいられる場所、安心していられる場所だと
思ってしまったのだろう。

リアルな現実に戻らないといけないという思いと逃げの思いで
結局はどのゲームも中途半端な状態で

あっちのオンラインゲームを少し、こっちのゲームを少し

朝は花札。昼はブラウザゲーム

夜はいろんなオンラインゲームという感じで
職業安定所の開いてない土日や祝日なんかは
ほとんど自分の部屋でゲームをしていた。

はあゝ（溜め息

いまから考えると恥ずかしくて溜め息がでてしまった

どうしても、実はこれは夢で目が覚めると
いつもと同じ毎日があるんだと
考えてしまう

どこか、いまでも夢の中にいるような。

だけど、これは逃げているのだと良く理解してもいる。
だって、目の前にこれだけリアルな現実があるのに
夢なの？って思うほど自分は頭が悪いわけでも

今、現実に体感していることを夢だと変換できるほど愚かでもないし
でも

「これはいくらなんでもないでしょう！」と叫びだしたくなる。

はあゝ（溜め息

あの時、あの場所の俺に
いまの僕が声を掛けれるのなら

夢じゃない！現実なんだ！しっかりしろと

おい！馬鹿！いい加減に危機感を持て！

と絶叫するだろう絶対に・・・

いや、声だけでなく足や手も出すことができるのなら

蹴り倒して口をふさいでも、殴りつけてでも

やめさせたはずだ

あんなことを願うなら

はあゝ（溜め息

あ・・・また溜め息がでた

僕、どうなるのだろう

第01話「溜め息」（後書き）

まだまだ、書き始めたばかりですが

少し暗くなったかな？と反省しています。

いずれ、構成と校正をいじったり直したりしていくつもりですが
いまは勢いだけは欲しいのでこのまま書きつづけて行こうと思っています。

誤字脱字等ありましたら是非ご一報くださいますように

また、ご意見などありましたらよろしく願います。

第02話　運命の日

それは、いつもと変わらない朝だった

少し違うのは今日が日曜日だということだけ

引き籠もりの俺でも、さすがに近所付き合いは大切で
その日の俺は近所の子供会のお手伝いを

するために朝早いうちから準備して出かけていた。

世話人である町内会の会長が手配した軽トラックを
貸してくださるという

少し離れた所に住む漁師さんの元に歩いて向かっていた

本当はひとりでもいいっても良かったのだけど

昔からよく面倒をみていた後輩が

一緒にくるという

後輩といっても俺より8歳も年下でありながら

すでに小学校高学年の子供を筆頭に3人の子持ちで

集合場所である公園でぶらぶらしていると

世話人の町内会の会長や年上の親御さんたちに

あれやこれやと、用事を言いつけられたり

酒が飲めない下戸なのに朝からビールを飲まされたり

奥さんにお酒飲んでないで子供の面倒を見てとか

言われたりするので、逃げてきたらしい

俺たちは雑談をしながら、お互いの近況を話したり

後輩の子育ての愚痴を聞いたり、途中の自動販売機で買った

ジュースを飲みながら煙草を吹かすつつのんびりと

海岸線に並走する道路を歩いていた。

本当にいつもと変わらない朝だった。

そのときまでは・・・

最初に気づいたのは後輩だった。

遠くから高速で向かってくるタンクローリーの音に
おもわず振り向いた後輩が叫んだ！

『危ない！！！』

俺は、何？と後輩に振り向いたときには

後輩に突き飛ばされていた

ドン！！！！

俺は持っていたジュースを落とし
おもわず驚愕に固まってしまった。

後輩の右手を跳ね飛ばしながら掠めていった
石油タンクローリーが俺たちのすぐ横にある民家に突っ込んだのだ

後輩は右手を押さえて蹲っていて
呻いている

右手はおそらく骨折か何かしているはずだ

俺はというと突き飛ばされたおかげで

かすり傷ひとつしていない

いや、少しだけお尻が痛いし

突き飛ばされた拍子に落としたジュースがずぼんにか
かかって冷たいのだが

そんなことはどうでもいい。

俺は目の前でおこった事に呆然としていたし

後輩は痛みに呻きながらも

俺と一緒に呆然と車が突っ込んだ民家を見ている

次に我に返ってまず、思ったことは

ああ！これは駄目かもしれないということ

もちろん俺たちのことがじゃない

民家に突っ込んだ車の運転手の生死のことだ

すでに運転席は完全に潰れていて

そこから大量の煙と運転手のものだろう血が溢れ出している

俺は後輩に

『おい、大丈夫か？』と声を掛けた

『大丈夫です。和哉さん。それより警察と救急車を呼ばないと…』
といて

立ち上がった。

『よし、俺は警察に携帯するから、おまえは救急車を呼んでくれ！
すぐに連絡しないと！』

俺は慌てて携帯を取り出し、警察に電話する。後輩は痛みに呻きながらも

なんとか携帯を取り出して救急車を呼んでいる。

そのとき、民家の中から住人のうめき声が聞こえた

俺は咄嗟に後輩と目を合わせると

『すまん、後を頼む！』といて

家の中に飛び込んでいった。

後ろから後輩が何か叫んでいるがよく聞こえない。

俺はそのときになって、やっとこれがひどい事故なんだと実感したのだと思う

家の中におもわず飛び込むまでは実感がなく冷静でいられたのに
実感したとたんに、自分の心臓の音がうるさくて

手や足が震えて、それでも必死に住人が発した埋めき声を聞こうと
耳をすます。だけど余りにも心臓の音がうるさくて

なかなかおもうように聞こえない。

俺は自分にしっかりしろ！落ち着け！心臓がうるさい！と念じながら
声を探した。

家の中は、もうめちゃくちゃだった。

それでも、なんとか微かに聞こえた声を頼りに台所だったらしきと
こに

入った。そこには冷蔵庫と壁に挟まれて気を失っている

おばあさんがいた。

どうやって、おばあさんを連れ出すことが出来たのか

実はよく覚えていない。

気づいたら気を失っているおばあさんを抱きかかえて後輩の元にた
どり着いていた。

肩で荒く息を吐きながら汗びっしょりになって後輩の傍にしゃがみ
こみ

家のほうを振り向くと、すでに煙が充満しているだけでなく、タン
クローリーから

漏れ出した石油が放つ独特のにおいも充満しているのが分かった。

後輩がすぐに

『ここを離れましょう。爆発するかもしれない！』といって

俺に声を掛ける。

俺もその危険を感じて

慌てておばあさんを抱きかかえてその場を離れた。

充分と距離をとったとき、おばあさんが気がついた俺は

『おばあさん。大丈夫ですか？すぐに救急車がくるので安心してください！』

と声を掛けると

おばあさんは何か不思議な目で俺を見るといきなり思い出したように叫びだした

『さくら！さくらはどこ？』

『え？まだ、誰がいるんですか！！』

『孫が孫が、まだ中に！！』

と慌てて家に戻ろうとする。

後輩も

『おばあさん、無理です。じっとしててください！』

とおばあさんを抑えて抱きついている。

俺は…

気づいたら家に戻っていた。

馬鹿なんだと思う。家の中はめちゃくちゃで足元は漏れ出した石油で汚れているし、いつ火がついて爆発するか分からない。

爆発なんかしたら、俺なんて即死だろう。

でも、それでも、俺はこのことで後悔だけはしなくなかった。

まだ、火が出ていないんだ！まだ、爆発していない！まだ、大丈夫だ！

俺はおばあさんの、あの必死な顔と涙を思い出しながらまだ、見つけていないお孫さんを必死に探した

！

どこかで小さな泣き声が聞こえる

俺はそこへ向けて突き進んだ。

壊れた壁や棚や箆笥を掻き分けて

俺はついに発見した。

まだ幼稚園くらいの子の女だろう。

小さな体が倒れてきた本棚と勉強机の間に挟まって泣いている。

運がいいのか、怪我はたいしたことがないようだが

重い本棚に挟まれて動けないようだ。

俺はその本棚をなんとか持ち上げて

その子を救い出すことができた。

でも、おそらく一刻の猶予もないだろう。

ここは、いつ爆発してもおかしくないのだ。

すぐにここから脱出しないと！

俺はなんとか家の外に飛び出すと女の子を抱えて走り出した。

できるだけ遠くへ少しだけでも遠くへ

家を飛び出る寸前で見た車の運転席からでる小さな火花に俺は恐怖していた。

女の子は外にでたので安心したのか

俺に小さな声で

『ありがとう』と言ってくれた。

俺はそのことがすごくうれしくて…

小さな女の子に俺は微笑んだ。

そのとき、轟音と共に俺たちは吹き飛ばされた。

爆発した民家の前は、道路を挟んで海になっている。

俺は吹き飛ばされながら、この子だけは守らないといけないと女の子をひときわ強く抱きしめた。

俺はなんとなく、これは助かるかも知れないと思った。

凄いい勢いで吹き飛ばされつつも、なぜか冷静にそう思ったんだ。海ならば、俺たちは助かるとそう思って

俺たちは、数十メートルを飛ばされ海へ落下した。

俺の願いは半分だけ叶った。

俺に守られて抱きかかえられた女の子は

結局、怪我らしい怪我をしていないみたいだ。

何故？半分だけかというと

俺のほうは助からなかったからだ

どうやら、俺は爆発のときに飛んできた何かの破片に

首の頸動脈をやられていたみたいだ。致命傷はそれらしいけど

それ以外にも俺は、背中やら足やらあちこちに飛び散った破片が突き刺さったり

していて、後輩が右手が使えないのに、一生懸命に俺たちの元にとどりついて、砂浜に引き上げてくれたときには

俺はもう虫の息だった。

でも、何故か俺は微笑んでいたと思う。

だってさ

後輩が俺に泣きながら

『和哉さん！なんで笑っているんですか？おかしいですよ！

和哉さん！頑張ってください。すぐに救急車が来ますよ！』

俺は、微かな声で

『女の子は？』と聞いた。

あいつは俺に涙を流しながら

『大丈夫です！無事です！ほら！』

と横を指差す。

そこには泣いているおばあさんに抱きしめられながら泣きじゃくって俺を見ている女の子が立っていた。

俺は霞んできた目でしっかりとそれを見ると

ああ・・・無事でよかったとやり遂げたと思いながら俺は、意識を失った。

それが俺のその世界で生きていた時の最後の記憶だった

第03話　夢

ここはどこだろう。

自分の部屋でないことは確かだ。

だからといって、どこかと言うとすれば。

厳密に言えば、あえて答えるならばただ

『宇宙？』

そうとしか形容のしようがなかった。

なんか星がみえるし、真っ暗だし

目の前に地球が見えるし

よくテレビなんかである宇宙空間の映像でしか

記憶にないからだ。

思わず疑問系で呟いてしまったのかもしれないだろう

それだけ変な事になっている。

何が変わたと聞かれても、どこからどこまでも変としかいいようもない。

まず、空気がないはずなのに普通に息をしているし、宇宙遊泳よろしく

ふわふわと漂っているし

何より俺・・・裸なんだけど。

そりゃ、誰も回りにいないし、誰も見ていないだろうけど

自慢ではないが、本当に餓鬼の頃や大学時代にはお酒に酔っ払って自分の部屋や友達の前で裸になったことはあるけど

社会人になってからいままで

お風呂に入ったりするとき以外はひとりで素っ裸になったことはない（はず）

記憶にないし・・・

だいいち、俺って砂浜にいたよね？そくだよね？

いや、もしかしたら救急車が来て

いまは集中治療室とか病室で寝ているのかもしれない

いや、きつとそうに違いないし、そう思いたい

もし、これが現実だとしたら

俺は・・・

頭の中である漫画のせりふがよぎるが

全力で否定したい。

” おまえは、もう死んでいる・・・ ”

このセリフまさか俺にはないよな？

だって俺、息してるし

まあ、宇宙空間でそれはありえないと思うけど

あまりにも嘘みたいな現実的でない状況に

諦めの気持ちと何の冗談？という気持ちたちが交差している

でも、これってどうなの？

現実逃避かもしれないけど、逃避だろうけど

その為にどうしてもやっぱりこの状況の

その一部が気になってきた。

一応、常識人だと思っている俺・・・自分ではだけど

だからこそ、このわけのわからない状況でも

俺はそれが気になる

どうしても譲れないというかこれだけは駄目だろう

俺、体に自信がないし、特に・・・あれな意味でもだけど

でも、そうじゃなくても普通の常識のある人なら

考えるはずだ・・・

例え、銭湯にいつでも出張にいつでも

他人がいるときは
前を隠している俺が言うのだから絶対だ。
だからこそだ

宇宙空間にはそれがあることを

俺は気にしてる

今の心境を表現するなら

” まじでどうにかして欲しい。”

こんな素っ裸で宇宙を泳いでいる所を
人工衛星なんかで撮影されたりしたら
一生の恥でしかない。

きつと、近所のひとから変態扱いにされるだろう。

誰も俺を知らない町に引越すしかなくなる。

それどころか

公然わいせつ罪とか公然陳列罪とか

こんなことで警察に捕まったりしたら

もう、考えるだけで泣けてくる。

なんの罰ゲームだ・・・これ

あれ？まてよ、日本の人工衛星ならいいけど、他の国の人口衛星に
撮影されたりしたら

どうなるの？まじで勘弁して、誰も写さないで（泣き

日本人の恥と言われたりしたら、ちよつと遠くへ引越すところか

日本国外に住むしかなくなる。密林とか海の孤島とか・・・

まじで泣けてきた。

まじで精密撮影とか拡大撮影とか勘弁してください。

俺、立ち直れない・・・

必死で股間だけでも手で隠しながら前のめりに宇宙を漂っていると急にあることが閃いた

なんで、思いつかなかったんだろう。

『あゝ！そっか・・・夢だ。』

ププ（笑い

なんかそう思うと凄く気持ちが悪くなって楽しくなってきた。確かに普通に息ができていところが夢らしい

もうひとつの可能性は幽体離脱とか

よくわからないのだけどそれなら

なったことがないので判断もできないが

もし、幽体離脱ならば、そもそも宇宙に

こようとは思はないはずだ。

だって、地球上ではないし、日本でもないし

宇宙にいきたいとか

考えたこともないし・・・

ならば可能性としてこれは夢だと思う

そう判断してしまうと

こんな夢はいままで、見たことがなかっただけに
なんかうきうきする。

そうと決まれば、何をしようかなあ・・・

股間も隠す必要もないし、夢なら何をやっても
人様に迷惑はかけない

だからおもいついたら即実行と考えて
やることにした。

とりあえず、バク転を試してみる、そしてムーンサルト（月面宙返り）

平泳ぎ 背泳ぎ 高速スピン 座禅

あはは（笑い

・・・飽きた。

本当にこっつて何もないな

夢なら夢で、何か遊べるものを手に持ってたらしいのに
相変わらず裸族だし。

せっかく夢の中で宇宙に来たのに

いざとなったら、あまりすることがないんだな

まったくつまらん・・・

夢が覚めてしまう前に、何かやれるだけの事をしないと
後で後悔する気がする。きつとするはず・・・

そつだ、ボレロだ！あのクラシック音楽を歌おう

ずんちゃっちゃ、ずんちゃっちゃ、ぱらりらぱりりぱらりらっ

・・・

・・・

・・・俺の音楽の引き出しのなさに落ち込んだ（遠い目

数時間後

いまだ、宇宙を漂っている俺・・・

俺はもう、知っている歌は歌いつくした

（うる覚えな歌詞はでたらめだけど・・・）

ひとり漫才をやり、筋。マンの屁の移動まで
やってのけ

他にやることがなくなつて

ぼろと膝を抱えていた。

『暇だ・・・』

そのとき

『そのひと』

『？』

誰だ？もしかして俺？

俺は声がしたほうに振り向いた。

何もない宇宙空間で神々しいまでの美しい絶世の美女が微笑でいた。

啞然として時が止った気がしたが

軽く数秒かかって俺は再起動した

そして

『・・・誰？』

おもわず股間を隠しながら前のめりに女性に問いかけた

もう、なんの罰ゲームだろう（涙目

こんな美しい女性の前でこんな裸で会うなんて

心からそう思いながら

おもわず答えていた

第03話〜夢〜（後書き）

まだまだ、序章のつもりなのですが
どうも、構成にしっくりきていません。

いずれ、1話から順番に再構成していきたいと思いますが
当分は様子をみながらじっくりと書き込んでいけたらと思います。

第04話　夢の続き

その美しい女性は俺をみながら微笑んだだけで

『なにが願いごとはありませんか？』とだけ尋ねてきた。

俺は戸惑いながら聞かれたこととこの状況を考えてみる
なに？これはなにごと？俺の願望が起こした幻？

ますます混乱してきた俺はつい聞いてみる

『願いごとですか？なんでもいいのですか？』

『はい。いいですよ』

『……』

俺はとりあえずこの状況は理解の外だったが

なんでもありの夢の世界、これも俺の願望がおこしたことなら
これはこれでありなんだろうと自己完結して楽しむことにした
夢だと思い込んでいるせいか妙にそれに納得して
すぐに冷静になって考えてみる。

もう宇宙空間は非常に飽きていたし

もつと別の場所で夢の続きを楽しみたかった

だから俺は思ったことを口にした

『それなら他の場所に移動させていただけませんか？』

『他の場所ですか？例えばどんな場所ですか？』

『はい。えつとですねえ』

まあ、夢だからなあ。なんでもいいよなあ。

暇なときに試したのだけど、他の場所にいけなかったし
きつと、俺のなにかが邪魔をしているのか

自覚がないから否定したいけど、俺の願望が裸族なのか
服があらわれなかったし

なにか遊び道具をだそうとしても何もでなかった
マイクとかMDプレイヤーとか

この際、俺の願望が本当はひとりではなく
自分では気づかなかったけど

誰かに別の場所に連れて行ってもらいたかったから
こういう女性が現れたのかもしれない。

これは否定しないけど

一度でいいから、こんな見たことのないような

美しい女性と一対一でお話してみたかった願望が

遅ればせながら夢の中で実現したのだろう

そう思うと、おもいつき楽しみたいし楽しむことに決めた。

でも、こんな宇宙空間でしかも、裸では

常に油断なく股間を隠して話すしかないではないか

だから俺はこれを改善したい

否、しなければならぬ。

だから俺はまず確実に自分の土俵で優位にたてる

しかも話題にことかかない場所にいくことを決意した。

『最近までやっていたゲームの世界に連れて行っていただけません
か？』

美しい女性は俺を見つめながら、何か考えていたが頷きながら

『その世界でいいですか？』と聞いてきた

俺はいきなり題名もいってないのに、その世界と断言した女性に戸
惑いながら

『あの・・・俺の。いえ僕の言っているゲームの世界がどこか判り
ます？』

とおもわず聞き返してしまった。

美しい女性はやわらかく微笑みながら

『ええ。わかりますよ。ですが、そのままの世界ではなく似たよう

な世界はあります。

そこでいいですか？』

俺は疑問に思いながらも、あれ？俺の土俵じゃないの？

夢なのになんか俺の願望のとおりのとこにいけないという答えに違和感があるし

俺が遊んでいたゲームのそのままの場所にいけないのはまずいなあ
あそこなら、俺ってお金持ちだしなによりもいろいろとプレゼント
できるものとか

おいしい料理とかいつでもだせるのに、あそこじゃないなら
どうしようか？でも、美しい女性はなんか俺の返答を微笑みながら
待っているし

このなにもないところよりは、ましだろう。夢だし・・・いいか

『えっと、そこでいいです』

『では、他に希望はなにかありますか？欲しいものとか』

え？他に希望？欲しいもの？なにそれ？考えてなかったよ

どうしよ・・・希望ってなんだろう？すでに場所は決まったみたい
だし

『希望ですか？そうですねえ』

俺は少し考えて、どうせ夢だし、この際いろいろとお願いしてみよ
うと思った

夢ならどんな事でも叶うはずだから（たぶん

とりあえず現実の俺は、怪我で瀕死になっているし

怪我をしても、すぐ直ったり死なない体がいいな

現実の俺は今年で40歳になるから、若い体がいい
夢なんだから20歳そこそこ若返ってもいいだろう。

それなら、もったかつこいい俺っていいんじゃない？

すごくむきむきしてるとか（笑

かなり無茶なお願いかも知れないけど、夢なんだからいいだろうと

軽く考えて

『それなら、決して死なない体をください。できればもっと若返っていつまでも若い体がいいです。それと、あなたのような美しい容姿が欲しいですね。』

それと着る服とそれと・・・』

調子に乗っているいろいろと願いごとをしてしまった。

あなたのような美しい容姿（笑

これは、つい口からでて、当初の希望からずれたけど

まあ、あまり気にしない。夢だしすぐに醒めるだろうしね
調子に乗ってさらにいろいろとお願いしてしまった

自分が遊んでいたゲームだけでなく

他のゲームの力もお願ひしてしまったけど

これはついおもしろいときで挟んでしまったのだけだね

美しい女性は楽しそうに微笑みながら聞いてくれていたし
その綺麗な目元とすべてを包んでくれるような瞳に

見つめられて、もう途中から自分でも何を話しているのか
解らなくなってしまうていた。

もうこの会話に夢中で舞い上がっていたからか

次第に話が希望とかから遠くずれていったのだけど
それすら気づかないでいた。

彼女はときどき、絶妙な合いの手をいれてくれて

本当に驚くくらい聞き上手で

僕はもう、夢ごちで、夢なら醒めないでくれと強く願ひながら

この絶世の美女との会話を楽しんでしまった。

いまだに前かがみに股間を隠したままだけど・・・

こんな美しい女性と楽しく会話するという長年の夢が

いつのまにかもう叶っているじゃないかという事に気づいて
幸せすぎてもう、これこそ夢の中という感じになっていた

覚えている最後のほうは

僕が助けた女の子のこととか、泣いていた後輩のこととか、家族のこととか

僕のいままでの人生のこととかを話していて

彼女は本当にいろいろなことを嫌がらずに親身に聞いてくれた。

それだけでなく、彼女は、夢なのいろいろなと教えてくれた。

なんでも僕が助けた、その女の子は成長すると世界の多くの人を救う病気の

特効薬のようなものを発明するという偉業を成し遂げるらしい。

後輩なんて、奥さんの間に4人目の子供ができて、生まれた男の子に俺の名前をつけたとか

僕の家族は、みんなすごく悲しんで、そして僕のことを誇りに思ってくれているとか

この美しい女性が来たのは、僕が女の子の命を救ったことへのお礼なのだとか

夢なのに、妙にリアルな内容に少し疑問にはおもったし

彼女が脚色をまじえてまで僕を勇気づけようとしてくれていると思っていた

僕はいままでのひとり寂しい宇宙遊泳の反動のせいかな

そんな脚色のことは些細なことに思えていてもいいことだった。

それよりも、人生初の絶世の美女との会話が楽しくて仕方がなかったし

いつになく饒舌でハイテンションな僕には、そもそもそんな疑問なんかな

あっさりと忘却の彼方に飛んでいったし

この圧倒的な絶世の美女の前でいつのまにか自分のことを俺から僕に変えている

自然な自分に気づいて、ああ、これからは自分のことを僕と呼ぼうと変なことの決意していることのほうがおかしく思えた。

あいかわらず股間を隠しながら会話を楽しんでいる僕に

その美しい女性は、にこにこしながら

『では、最後に私からもいくつかの贈り物も差し上げますね。

貴方の人生が幸福でありますように』

そういつて、悪戯^{いたずら}を思いついたような微笑を浮かべて目をきらりと輝かせながら

僕のひたいにキスをした

あれ？なんか直感的に今のがこのひとの真実の姿なのかと思ったけど
そのあとのキスでどうでも良くなった。

ああ・・・ひたいに柔らかい唇の感触がと幸せを感じながら
僕は、意識を失った。

それが夢の中と思っていた僕の最後の記憶だった。

第04話　夢の続き（後書き）

もう、悩みすぎてちょっとブルーです。

文章が長く読みずらいかもしれませんが、もう私は日にちを置いて構成を修正しない限り今すぐには、無理とはいいませんが、どうも修正する気力が残りませんでした。なにが悪いのかというより、どこを修正したら読みやすくなるのか……

本当は昨夜の0時に投稿予定が半日ずれてしまいました。

直前で、重大なミスを発見、即修正。あれ？なんか文章めんどくなつてない？

と思いながら、ちまちまと微調整しつつ気づいたら深夜2時……
うっかりと保存もせず、更新をおしてしまつなど、私自身なにをや
ってるのか

訳わからない状態に突入中。なのでいったん、きりのいいところで書き
き終わり

いずれ文章の構成と詠みやすさを追求したものに変わっていくと思
います。

それまでは、放置です。あいからずご了承ください（いや、願
いします……）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1639v/>

僕の異世界転生記

2011年10月9日03時47分発行